

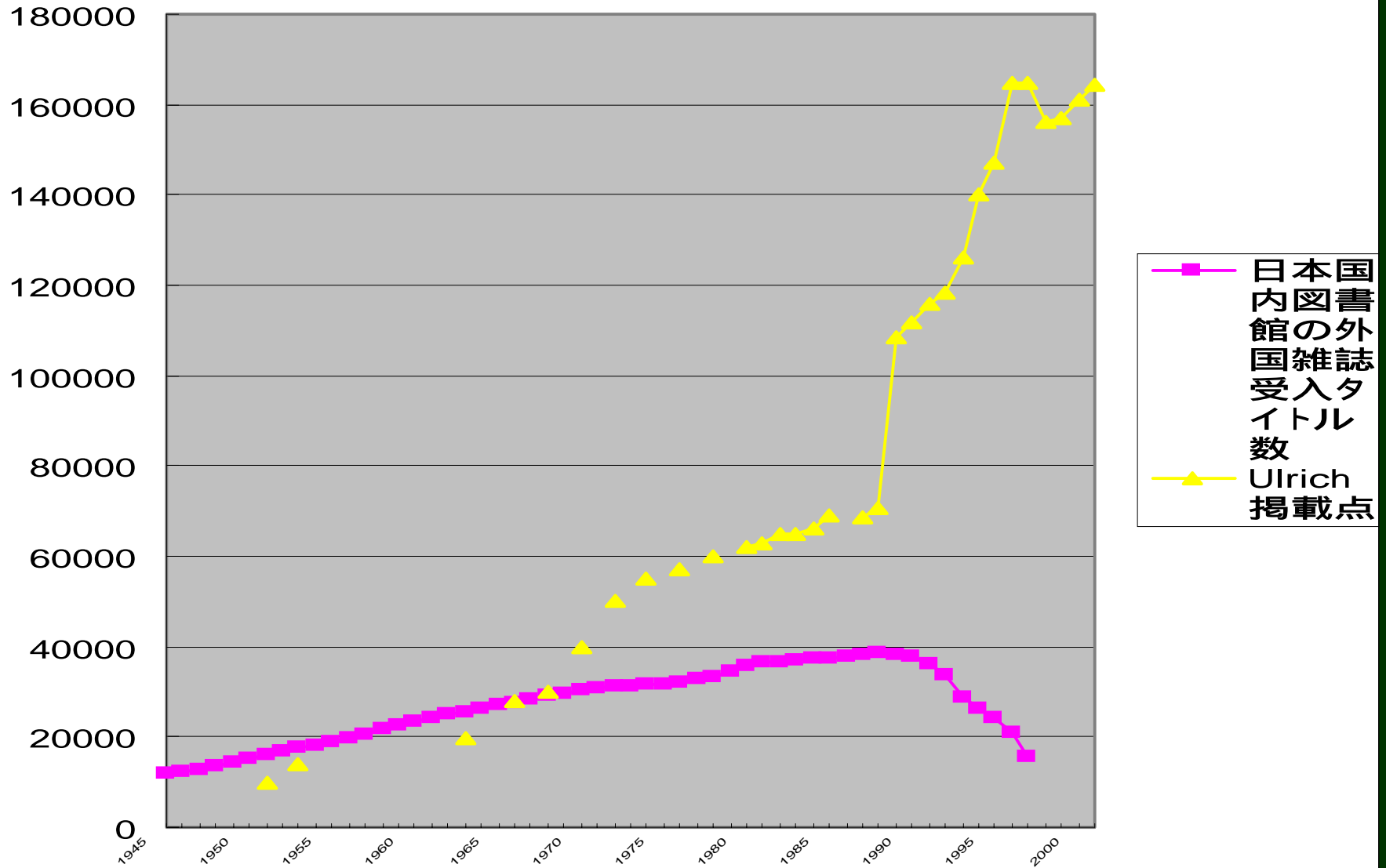
# 雑誌の電子化は大学図書館に 何をもたらすか

土屋俊  
(千葉大学)

# 何が変化しつつあるのか

- 日本の学術情報基盤の危機
  - 雑誌タイトル数の(不思議なまでの)急激な減少
  - コンソーシアム形成の未熟さ
    - 欧米、そしてアジアからの著しい遅れ
  - 学術出版電子化の未熟
    - NACSIS-ELS、J-STAGEなどにもかかわらず
  - 図書館の体制の不備
    - 先導的電子図書館プロジェクトにもかかわらず
- 研究スタイルの変化との即応
  - 国際化、学際化(新領域創造)
  - 資源の有限性(好奇心のみからの研究は可能?)
  - 「研究の担い手」論(知識ベース社会における基礎と応用との近接化)

日本国内図書館の外国雑誌受入タイトル数と  
Ulrich掲載点数



# 図書館における影響の範囲

- 物品購入から使用許諾へ
- タイトルごと予約購読からデータベース(パッケージ)へ
- 保存からパーペチュアル・アクセスへ
- 配架からポータルへ
- 入館記録(?)から利用統計へ
- 資金力の重要性 寡占化の進行
- 「コンソーシアム」の重要性の増大

# 各国のコンソーシアム

	ドイツ	台湾	韓国	オーストラリア
名称	Nord Rhein Westfalen Consortium	CONCERT	KERIS	CAUL
参加機関数	24	179	152	59
		公私立大学図書館 研究機関	大学図書館	大学図書館 政府研究組織 第三機関
タイトル	3800 有料 2,200 無料 1,600			
契約会社	計4社	計21社(83データベース)	計60データベース以上	計32データベース
	Elsevier Springer Kluwer Academic Press Wiley、Lipincottは準備中	Academic Press Elsevier IEEE Springer EBSCO	IEEE EBSCO OCLC ECO ACM	Academic Press JBC ACS Blackwell Science Wiley
予算規模	USD 3,999,807 (SDのみ)	USD 8,000,000	USD 10,600,000	USD 11,600,000
資金	政府資金	政府資金及び会員	政府資金	会員

# 電子化による研究スタイルの変化

1. 研究者が自分でつくる「文献目録」の意味の変化
2. 「論文をコピーしてファイルしておく」という作業の意味の変化
3. 「引用文献を見に行く」という作業の意味と価値の変化
4. 論文で記述された事実を自分で再検証するという作業の意味の変化
5. 「最近の研究動向をサーベイする」という作業の意味の変化

# 10年前の文系研究者の研究スタイル

- 入門書、概説書を読む
- 研究書を読む
- 文献カードを作成
- 図書館で雑誌を探索(実は、研究室だけ)
- コピーをとる(ここで終わる論文が多い)
- 雑誌を読み、さらに文献を探索(飽和するまで)
- メモを作る
- 構想を練る
- 論文を書く

# 10年前の理系研究者の研究スタイル

- 追実験中心(本当に独創的研究が普通だったか)
- 近代科学パラダイムとしての「教科書・実験室・雑誌論文・業績評価」サイクル
- したがって、まずテーマを探して論文を読む
- 実験室にこもる、データをとる
- 下敷きにする論文の書き方を学ぶ(学生の場合)
- 論文を書く
- 投稿する
- レフリーからのコメントにしたがって修正
- 掲載
- リストをつくる

# 今の(そして、これからの)研究スタイル

- まったく変化しない人々
  - 冊子体で十分
  - Establishした学者には自動的に情報が流入
    - レフリー、課題審査、業績審査、採用審査
  - Establishした分野でないと権威になれない
- 新しい研究スタイル
  - 境界分野でおもしろい展開
  - 境界分野は身内のみか、お互いに知らず、偶然の出会い
    - WWWは重要な媒体
  - 既成の近代システムへの疑問

# これからの(わが国の)研究情報基盤

- 徹底的な電子化の進行
  - キャンパス全体の電子化(教務、授業etc)
  - 「学会」の電子化
    - でも、日本の雑誌はまだ
  - 一般社会の電子化(これなしに線は太くならない)
- 学術情報流通における「資本主義」(?)
  - 商業出版者における寡占化志向(?)
  - 学術団体出版者におけるライセンス・ポリシー
  - 図書館からの働きかけ(SPARC、ISCF、HighWireなど)
  - プレプリント公開
- そしてわが国は？

# 図書館の役割

- キャンパス内環境整備
  - ネットワークと端末群
  - オフキャンパス利用
- 利用者教育
  - 関心のある人に教えるでは不十分。全員義務化
  - 将来は所詮電子環境のみ。学生をターゲットに
- 契約
  - 価格だけでなく利用条件への配慮
  - コンソーシアムマネージャ
- 利用状況管理
  - 予算管理・運用・負担の配分
  - 利用者教育のプランニング

# 利用の裏に利用環境

- ネットワーク環境の必要
  - 図書館からのアクセスに意味があるか
  - 学外からのアクセスの正当化
- 端末
  - 端末からのプリントアウト(著作権、紙代)
  - 目的外利用の排除(?)
- 環境とコミュニケーション
  - 利用規程、利用者教育、
  - 予算確保

# 利用環境の裏に契約

- どんなセールストークも契約しないと信じられない
  - 「使いやすい」インターフェイスが信じられない
    - 契約形態による便宜性の差異
    - 他のコレクション、データベースとの連携の要求は変？
- タイトル・著者(・書評、評判)だけでの購入よりはまし？
  - 「トライアル」はなんのためにあるのか？
  - 先進ユーザの開拓の必要性
- 契約は金額プラス利用条件
  - バックファイル
  - パーペチュアル・アクセス

# Big Dealかタイトルサブスクリプションか

- 出版者が自社刊行雑誌を全体として提供するパッケージ、データベース提供方式
- 利用者としても意味がある(非購読誌利用率)
- Big Deal 論争
  - 古典的研究図書館 vs OhioLINK
  - Value for Moneyが大きい(賛成)
  - 囲い込みに過ぎない(反対)「一度契約したらやめられない」

ある大学における電子ジャーナル(SD)の利用状況(2000年9月-2001年4月)

アクセス回数	タイトル数	(割合)	内訳			
			購読誌	(割合)	非購読誌	(割合)
1001回以上	27	2.3%	26	2.2%	1	0.1%
101-1000回	369	30.9%	276	23.1%	93	7.8%
11-100回	525	44.0%	234	19.6%	291	24.4%
6-10回	88	7.4%	21	1.8%	67	5.6%
5回	19	1.6%	6	0.5%	13	1.1%
4回	25	2.1%	9	0.8%	16	1.3%
3回	21	1.8%	2	0.2%	19	1.6%
2回	24	2.0%	5	0.4%	19	1.6%
1回	39	3.3%	7	0.6%	32	2.7%
0回	57	4.8%	7	0.6%	50	4.2%
合計	1194	100.0%	593	49.7%	601	50.3%

# 契約の裏に統計

- 契約は「値下げ交渉」ではない
  - キャンパスごとの(顕在的)ニーズに応じた選択
    - 前提としてのニーズの把握
    - Value for moneyの追求
  - 「非購読誌購読」の意味
    - 潜在的ニーズの把握の重要性
- 利用統計に基づく合理的交渉
  - 「しかし、本当にニーズはあったのか」の懐疑論は当面保留
  - 「図書館のパフォーマンスとしてタイトル数はほしい。しかし使わないものを契約するのは変」
  - 千葉大学の例(理学部・工学部問題)

# 電子ジャーナルはまだまだこれから

- 出版社にとっても未知の世界
  - どんなサービスが望まれているかを知らない
  - どんな価格体系が合理的であるかを知らない
  - どんな契約システムが適切であるかを知らない
- 研究者・学生にとっても未知の世界
  - 研究成果公開方法を個別研究者へ奪回する可能性と、素朴な当惑とたんなる保守主義
  - 従来型業績評価システムへの不信と、革命的变化への恐れ
  - 研究総コストにおける資料コスト算定の必要性
  - 教育方法のアモルファス化がもたらすもの(雑誌・教科書連携の崩壊?)<sup>h</sup>

# 要するに、図書館から展望を！

- 仲介者としての役割り
  - 「価格」「コスト」のバランスを！
  - 利用環境の統合化、共通化の提案を
  - 統計の共有の主体として
- インストラクションの主体として
  - そもそもそれは何であるかを「啓蒙」
    - 利用、契約、統計、著作権、etc
  - ネットワーク環境(セキュリティつき)の整備
    - ガイドライン、規程の共通的整備
  - より便利に使う方法を指導する
    - 図書館間共同作業の可能性